

むさしの Link

昔と今、人とまちを
つなぐストーリー

吉祥寺のまちは、 いつも音楽で つながっている

60年前、最先端のジャズ喫茶に若者たちが集った時代から、まちのそこかしこにライブハウスが点在する現在まで、吉祥寺のまちにはいつも音楽が満ちあふれています。吉祥寺音楽祭にも携わるライブハウス運営のプロフェッショナルに音楽でつながるまち・吉祥寺の昔と今についてお聞きしました。

ジャズのまち吉祥寺から フォークのまちへ

——お二人の吉祥寺との関わりはいつからですか？

川名 私は府中市の生まれで、子どもの頃から吉祥寺かいわいにはなじみがありました。20歳の頃に音楽業界に入って、ヤマハのポピュラーソングコンテストの舞台監督をはじめ、さまざまなアーティストのコンサートツアーの舞台監督をしました。都内でライブハウスの運営に携わるうちに「吉祥寺でライブハウスをやらないか」と誘われて、1999年に「吉祥寺Planet K」をオープンさせることになります。小泉さんは新潟県出身でしたよね？

小泉 出身は新潟県で、専門学校で音響を学ぶために上京して、北浦和の「エアーズ」というライブハウスでアルバイトをしていました。そこでは

川名 野口さんはジャズバー「SOME TIME」など、数多くの店を手掛けて「ジャズのまち吉祥寺」のイメージを

音響だけでなく照明やチケットのモギリ、ドリンク、ブッキング（出演交渉）など、すべての業務を経験しました。駅前で楽器を持って歩いている高校生たちに声を掛けて高校生だけのライブを企画したりもしましたね。この頃から、ブッキングには割と向いていたみたいで（笑）。その店に吉祥寺のライブハウス「SHUFFLE」の店長が遊びに来ていたのが縁でアルバイトをすることになりました。吉祥寺との関わりはそこからです。

——吉祥寺と音楽の関わりでいうと、1960年代に野口伊織さんがジャズ喫茶「FUNK」をオープンさせ、当時吉祥寺にあった武蔵野美術大学の学生たちでにぎわって「ジャズのまち」として知られるようになったそうですね。

川名 野口さんはジャズバー「SOME TIME」など、数多くの店を手掛けて「ジャズのまち吉祥寺」のイメージを



かわ な あきら
川名 “Tiger” 昭さん

1950年生まれ。東京都出身。音響エンジニアや舞台監督として数々のライブに関わり、四谷の伝説的ライブハウス「FOURVALLEY」の運営などに携わった後、1999年、ライブハウス「吉祥寺Planet K」の店長に（現在は顧問）。吉祥寺音楽祭の顧問も務めている。

こいずみ さ や か
小泉紗也加さん

1991年生まれ。新潟県出身。ライブハウス「吉祥寺WARP」店長。愛称は「きょんきょん」。19歳からライブハウスのブッキングに携わり、27歳で同店の店長に。2019年から吉祥寺音楽祭のブッキングも担当。若手アーティストの発掘にも尽力している。



つくった人ですが、一方で吉祥寺には「フォークのまち」という側面もあります。吉祥寺の音楽文化を語る上で、1970年代のフォークブームは重要な転換点だったと思います。高田渡さん、中川イサトさん、中川五郎さんなど、吉祥寺を拠点に活動していたフォークシンガーがいて、特に高田渡さんが全国規模で有名になったことから吉祥寺とフォークのイメージが浸透していきました。あと、今のロフトの場所にヤマハがあつて、楽器の販売だけじゃなくて練習スタジオがあつたことも音楽好きの若者を引き付ける要因になったんじゃないでしょうか。

ジャンルや年齢の壁を超えた 真の音楽のまち 吉祥寺を目指して

——川名さんが吉祥寺音楽祭と関わるようになったのは2002年からだそうですね。

川名 吉祥寺音楽祭は1986年から開催されていますが、当初は1970年代のフォークブームやその後のニューミュージックの流れに乗って始まったと言つてよいでしょう。その後、第5回から第16回まではジャズコンテ

ストになる一方、時代に沿つた変革が求められるようになります。そんな時に声が掛かり、2002年の第17回から大幅なリニューアルをすることになりました。大胆に変えることに対して商店街関係者の反対意見もありましたが、当時の市議からの「50回は続けないと文化は根付かない」という言葉に支えられて継続できたんです。

小泉 私は2019年から吉祥寺音楽祭に参加するようになって、今年は北口駅前広場とコピスの2カ所のブックキングを担当しました。最初にやつたのは、吉祥寺に10軒ほどあるライブハウスの店長やブックキングマネージャーを集めて、どんなアーティストがこの音楽祭にふさわしいか、皆さんの意見を聞くことでした。それぞれのお店の営業が終わった後、深夜の居酒屋に呼び出して（笑）。みんなが納得する形で選出していったんですが、注目するアーティストが結構重なつていたので、それほど意見が割れることはなかったですね。吉祥寺にゆかりのあるアーティストで、かつ今後の音楽業界で活躍が期待される若手を中心にラインアップしました。

川名 吉祥寺のライブハウスは、横のつながりが強いというか、本来ライブ

ル店のはずなんだけどみんな仲が良いですね。

小泉 日頃から店長同士がよく飲みに行つたりしてますから。なかなかほかのまちでは見かけない光景かも。

——吉祥寺音楽祭は昨年40回を迎えたわけですが、音楽祭をさらに盛り上げつつ吉祥寺と音楽との関わりを深めていくためのビジョンはありますか？

川名 ちよつと大きな話になりますけど、吉祥寺が、年齢やジャンルの壁を取り払つた「真の音楽のまち」として発展することを望んでいます。ジャズやフォーク、ロックが混ざつてニューミュージックやシティポップになったように、いろんな壁をなくして音楽を



2026年の吉祥寺音楽祭。小泉さんがブックキングを担当した吉祥寺駅前のメインステージ

樂しめるまちになるのが理想です。

吉祥寺音楽祭に関しては、武蔵野市民15万人全員が納得できるような音楽祭を目指したい。そのためには、かつて開催していた「フォークジャンボリー」を復活させたり、あるいは駅前広場に三大テノール歌手を呼んでマイクなしの生歌を披露してもらつたりなんていう壮大な夢もあります（笑）。今年、駅前広場で行つた投げ銭では3日間50〜60万円が集まつて、幅広い年齢層から音楽祭に対する支持や期待が高まつていることを実感しました。

小泉 吉祥寺MUSICが入るバイオレットビルは、地下1階がライブハウスで、上の階にはバーやスタジオがあります。このビル全体を「吉祥寺の音楽発信の拠点」にするのが私の夢です。ここに来れば、いろんな人との出会いがあつて、話の合う人同士がバンドを組むきっかけになるといいなと思つて、いろいろ仕掛けているところです。それが吉祥寺音楽祭にもつながつていけば面白いですね。いまはスマートフォンの気軽に音楽が聴ける時代ですが、ライブでしか味わえない醍醐味は、むしろ昔より増していると思います。これからも吉祥寺らしい若手アーティストの背中を押す存在でいたいですね。